1-3 日常を変える

第三節　日常を変える

1. 学ぶ時間

自宅の工房で制作していること、そして時々大学の非常勤講師として学生へ指導することがガラスに触れている日常だった。

私はガラスに関わる日常に変化を求め、本学大学院へ進んだ。仕事として学ぶスタンスに加えて、教育機関で研究して学ぶ時間を求めた。

この結果、様々な変化とともに制作過程や思考に対する刺激が劇的に増えた。初めての経験には抵抗感を伴った。しかし、それを感じるたびに自分が作ってきたセオリーを振り返ることになり、意識するきっかけになっていた。

今まで続けてきた制作過程や思考パターンは、自分にとって動きやすい、考えやすい状況に情報が整理され、合理化されている。

その合理化の目的は、同じ行動を繰り返して安定していくためのものであり、それ以外の要素に変化のヒントを求めていくべきだと考えた。

仕事はクライアントの意見や販売の諸条件が影響する。私と他者のバランスで判断される。新しい制作への取り組みを考えるには、仕事から離れたところで考え、自分だけの意思で作ることが必要だと思った。

自宅から取手まで片道３時間を電車で通学した。長時間の移動だが、普段の日常から違う日常へ気持ちをスイッチするためには都合が良かった。この時間内ではできるだけ本を読み、これまで興味を持っていたことを知り、そして考えることができた。

大学で学ぶという立場に自分を置き、研究をするために思考の流れを変えることに苦労した。自宅工房での制作は「作れるものを作る」でありそこで進めた研究は制作における技術の拡張が主目的だった。そして大学院での研究は、制作における思考の拡張に目的を定めた。作りたいものを作る、ということがまず大きな疑問を私に与えた。

作りたいものは何かということは、わかっているつもりだった。しかし実際にそれを念頭に置くと、制作していた目的がそれではなかったことが浮き出してきたのである。

何を作りたいのか、何に興味を持っているのか、ガラスで作る意味は何か、を考えながら、スケッチをして資料を集め、必要な技法を探し、テストを続けた。

作りたいことがないはずはないと考えていたが、すぐそれが作品という完成形に繋がるイメージは生まれなかった。

技法から何か作れるものを探すというプロセスから、作りたいものから技法を探すプロセスへ変えること、これは思考パターンの再構築であり、非常に困難な作業だった。なぜなら、今まで続けてきた行為の無意識な部分を意識しなければならず、制作の成功パターンを意識的に避けて考えなければならなかったからだ。

自分の工房、領域では作れるものに限界を感じていた。今はむしろ限界を作っていたと考えているが、自分が制作可能な領域で、どれだけクオリティを上げられるかを常に考えていた。その思考パターンは、制作の条件が工房設備や材料、技法から決められた。自然とその条件に合わないアイデアは除外されていくことになった。

学ぶ場に入り、研究自体を見直そうとした時に予想以上の思考変化が必要なことがわかった。意識していない部分を見直す方法を見つけるため、意識できていることで思考することを制限することに努めた。

1. 縛りを作る

私は大学院で研究するにあたり、今まで使っていた材料、技法、そして好きな色を使わないことにした。共通することは、自分とガラスだけである。

ガラスについては、フュージング技法で使用してきた板ガラスを使わずに制作することにした。平面形状の素材から始まる制作行為は、平面を使って制作するという、素材形状から決められた条件であり、素材に自分の意思が及ぶ以前から決定されている。それを除外することによって、ガラス素材を選択する自分の思考の意識できていない部分を意識できるのではないかと考えた。

そして、板ガラスを溶着して制作するフュージング技法を、自分の制作過程から一旦除外することにした。この板ガラスを扱うための技法に頼るということは、素材形状に対する条件を緩めていくことを阻害する恐れがあり、自分の思考をそこで閉じてしまうことにもなると考えた。

また、私は板ガラスで多くの色を使用していた。色板ガラスの特徴でもあり強みでもあった。色にはそれ自体が持つイメージがある。そのイメージを板ガラスの色として使用していたが、それから距離を置くことにした。色のイメージは作品にとって重要だが、板ガラスを使ったフュージング技法では、その色のイメージが作品の大部分を支配してしまうことが多い。自分の思考を客観的に知るために、透明クリア、白、黒、または単色で作ることにした。色を使う理由を再確認するためだったが、色抜きで造形を考えることは自分の造形意図を明解にすると同時に、板ガラスを用いるフュージング技法では制限が多くあった立体のフォルムを考えることが可能になると考えたからである。

なぜフォルム重視にしたかったのか。今までは板ガラスを主材料として作品制作してきた。そのため、フォルムは板状に作りやすかった。反面、塊や細かな造形を作ることは難しく、発想から除外してきたからだ。外されたアイデアの方が今回はより重要で、想像するフォルムに自由を与えたかったのである。

ガラスには幅広い質感表現がある。それを色よりも優先して意識して制作したいと考えていた。熔かす、砕く、割る、削る、磨くなど、質感を求めていくときには様々な方法を使いガラスに手を加えていく。これは技法の幅と相関関係にあり、うまく質感を扱うことができるようになるということは、技法を使い分けることができると言える。

キルンワークという技法の大きな括りも取り払い、ホットワークやコールドワークを用いて研究を進めることにした。

1. 場を変える

自分のために設計した工房は、当然とても使いやすい。しかし、それは自分が決まった動きをして、決まったものを作ることが前提になっている。それは制作技法や制作物を限定して作るということでもある。私はある技法領域のスペシャリストとして仕事をしていくべきであると考えていた。それが制作物のクオリティを向上させ、外部から見た私の特徴に見えると考えていたからだ。

しかし、私は自分の制作思考に疑問を感じた時、スペシャリストの領域に窮屈さを感じ、そういった制作を支えている工房環境に疑問を持つようになった。そこにある設備で制作できるものを考えることが多くなっていたことに気がついたからである。設備は制作に条件を作っていき、思考の枠組みを作り出していたのである。

「違う場所で制作してみたい」と考え始めたのはこの時からで、これはその後の留学、そしてAiRへと活動は繋がっている。

本校では、そこには自分が用意したものではなく、複数の学生が共同で使用するガラス造形設備が揃っていた。ガラス造形教育をするための一般的な汎用性のある設備であり、アーティストが仕事で使用するような、ある一定の傾向を持った特殊性のあるものはなかった。

繰り返しになっている。

大学ではガラスの基本的な造形技法を学び、実践制作する。ガラス造形技法を総合的に学ぶため、ほとんどの技法に向けた設備が整っている。基本的技法は、ホットワーク、キルンワーク、コールドワーク、ランプワークが主なものである。それを自由に選択して、制作に用いることができることは、キルンワークを主体にする私にとって、技法から受ける新しい発想を期待させた。そしてガラス溶解炉があり、熔けた状態のガラスを使って制作することが可能となった。

熔けているガラスは、ホットワーク用の透明ソーダガラスであり、。それをそのまま吹きガラス技法で用いたり、取り出して一度冷やし、石膏型に詰めて塊を作ることができた。

ガラスを液体状態から扱うということは、板ガラスを使った制作とは全く違ったプロセスを踏むことになった。

1. プロセスを変える

私はここで、自分が作りたいイメージを先に作り、それから技法を決めることを考えることにした。

まず、自分が何に興味を持っているのかを追い求めた。自分が持つ欲求と興味、必要だと考えるものやことをできるだけ客観的に意識できるように努めた。これは、大学院で学ぶ以前にも望んでいたことだったが、工房や素材などに頼ることが多く、それだけに難しかった。

新しい技法を考えることには常に興味があったが、そのプロセスは、新しい技法を考え、それで作ることができるものを見つけて作品化するものだった。それを逆から進めようと考えた。興味があるものを作ろうとした時、それに必要な技法と素材を探すことにした。

技法に縛られない手順

ガラスなどキルンワークは加熱してガラスを溶かしていく制作、一方吹きガラスのようなホットワークは、加熱され熔けたガラスを冷ましていくことで造形していく技法だ。同じガラスだが、熱に対する真逆のアプローチであることに興味を感じた。

最初、ホットワークの領域で、キルンワークで作られた板や塊を扱うことを考えていたが、これはホットワークとキルンワークの融合ではなく、あくまでホットワークだと考えるようになった。ならば、ホットワークで作られたものをキルンワークへ持ち込み制作することもできるという事に気付き、実践することにした。

材料は板ガラスでなくてもよい。最初は戸惑いが大きく思考が止まることが多くあったが、目の前にある熔けたガラスには強い魅力を感じていたので、それに触れ続けた。吹きガラス技法は習得するために反復練習を必要とした。電気炉の中にあるガラスの動きをずっと想像してきた自分にとって、目の前で瞬時に形が変わっていくガラスは、全く別の素材に感じた。

同じガラスを使って、全く違ったプロセスを使って制作する経験は、無意識に作っていたガラス造形への既成概念をゆっくりと溶かしていった。

1. 気付き

ガラスを動かす

キルンの中でガラスを動かすことを考える

板

モチーフを作る　興味のあるテーマを探す。

美術教育の授業を受講　好きなものから共通項を探す　気配、動き

異素材の効果　金属ピン、耐火材　ガラスの役割を考えることになる

ガラスで何を作るかから、ガラスが何を作るかを考える